

今日は発明記念日

中学一年 姫野 修旗

二〇七〇年夏、ぼくは「JAXA 宇宙アイデアコンテスト」会場へ向かっていた。これは、未来の宇宙生活にむけての発表会だ。

「さあ、早く。発表が始まってしまおうよ。」

妹がぼくをせかす。日頃は忙しい家族なのだが、今日は応援にかけつけてくれた。

準備は万端だ。ステージの裏で待機していると、合図が聞こえた。

「では、最初の発表にまいりましょう。」

さっそうと登場したぼくに、司会がマイクを渡した。

「よろしくお願ひします。まず、最初の発明は、一瞬にしてどんな液体でも真水になるストローです。」

ぼくは、真っ赤なケチャップにストローをブスツとさした。そしてチューチューと吸い込むと、ストローを通る液体は透明になった。

「喉の渇きがいえ、緊張がとれてきました。」

ぼくのひと言で、会場はドツと沸いた。

このストローは、どの従来品よりも完成度が高く、どんな汚い水でも、どんな液体でも、瞬時にきれいな水にしてくれる。

いわずもがな、宇宙では水が貴重だ。国際宇宙ステーションをはじめとするステーションや基地では、今でも水のリサイクルシステムを利用し、船内の九十三パーセントの水を再利用している。

水の惑星といわれる地球でさえ、すぐに飲める水は一パーセントほどしかない。

どこに暮らすにしても、安全な水の確保は重要な問題だ。これがあれば、ゆくゆくは、あらゆる惑星の貧困や飢餓、健康や福祉の問題の軽減に繋がっていくだろう。

「次は、一年中好きなものが育てられる花壇と畑です。」

これは、光触媒を用いて一ヶ所で春夏秋冬すべての季節の花や野菜、果物が育てられる発明だ。

敷地内の道具には全てAIを搭載し、温度・湿度センサーをもとに、給水器やミストの出るスプリンクラー、ライトやエアコンなどが自動で動く仕組みだ。肥料なども、育てたい植物に合うものが、自動的にまかれていく。

「これでは、匂という風情がなくなってしまうわいか。」

「でも、これがあれば、地球の貧困や飢餓、不平等さえも、なくしていけるかもしれないよ。」
会場からは、賛否両論の声が聞こえてきた。

「レタスは、抗酸化物質を含んでいますので、健康やお肌のためにも、宇宙生活にも欠かせません。ライ麦は、火星の土でもよく育ちますので、年四回ほどの収穫が見込めます。」

ぼくは、この発明が、火星への移住計画が本格化する前に完成して、安堵していた。

「最後に、人間にそっくりのAIです。」

人工皮膚をまとった大人や子供のAI。そして、犬や猫そっくりなAIたちだ。

今までのAIと違うのは、見た目だけではない。自ら学習する能力を高めたことに加え、最新の感情エンジンを搭載したことにより、今まで苦手としていた五感を使った情報処理や、常識や高度な読解力を持ち、人間らしい柔軟な判断も出来るようになった。

それらを、従来のAIが得意とする知識を蓄積したり、手順通りの作業をしたり、大量のデータから傾向をつかんだりする能力と合わせると、今まで以上に、わたしたち人間を助けられる存在になりうるわけだ。

「ここにいるAIは、掃除をするだけではありません。」

各家庭では、家族の健康管理や介護などの生活サポートはもちろんのこと、わたしたちの話し相手や、よき理解者となるだろう。

社会においては、多くの人が生活の中で不便に感じていることを探し、それを解決する方法を模索するコーディネーターやカウンセラーの役割も果たす予定だ。

もちろん、これから始まる宇宙生活においても、人間が出来ないことを積極的に担ってもらうことになる。

「まだまだ『AIが人間を凌駕するのではないか。』と恐れる声もありますが、決してそうではなく、AIはぼくたちの強い味方です。」

日頃の研究成果を、ぼくが存分に出し切ったところで、会場にいた男の子がさげんだ。

「やっぱり、ぼくは宿題をやってくれるAIが、一番ほしいよ!」

会場は、またしても沸き、ぼくはステージを後にした。

今からは、家族のいる客席へ行き、今後の参考のために、他の研究発表に耳を傾けよう。審査結果も気になるところだが、二の次だ。

今日は、ぼくの研究と人類の宇宙生活にとって、大きく一步前進した日だ。そう確信を初めて持てた今日は、ぼくの発明記念日だ。